

国史跡永納山城跡 現地説明会資料

平成 22 年 11 月 20 日 (土)
西条市教育委員会

1 遺跡の概要

(1) 史跡概要 (史跡指定：平成 17 年 7 月 14 日)

ア 永納山城とは？

永納山城は、日本で最も古い城である「古代山城」の一つです。古代山城は、教科書にも出てくる「白村江の会戦 (663 年) 前後の国際的緊張関係の下、築かれたと考えられる城です。『日本書紀』には古代山城に関する記載が見られ、白村江での敗戦後、百済の亡命貴族の指揮の下に築城された、とあります。このような文献に名の出てくる山城は、築城年代のはっきりしているものが多いのですが、永納山城を含め文献に名のない山城の時期については、いまだ細かい点で意見が分かれています。しかし、近年の各地の山城の調査成果からおおよそ 7 世紀の後半～8 世紀の前半に築かれたということは間違いないと考えられています。

また、築城目的については、単に国家防衛という一側面のみで捉えられるのか、他の目的もあったのか、現在も調査成果に基づく研究が続けられています。

イ 永納山城基礎データ

(ア) どこにあるの？

愛媛県西条市河原津。南北にそれぞれ道前平野、今治平野を、東には瀬戸内海を見渡すことのできる独立丘陵に築城されています。

(イ) 面積はどのくらい？

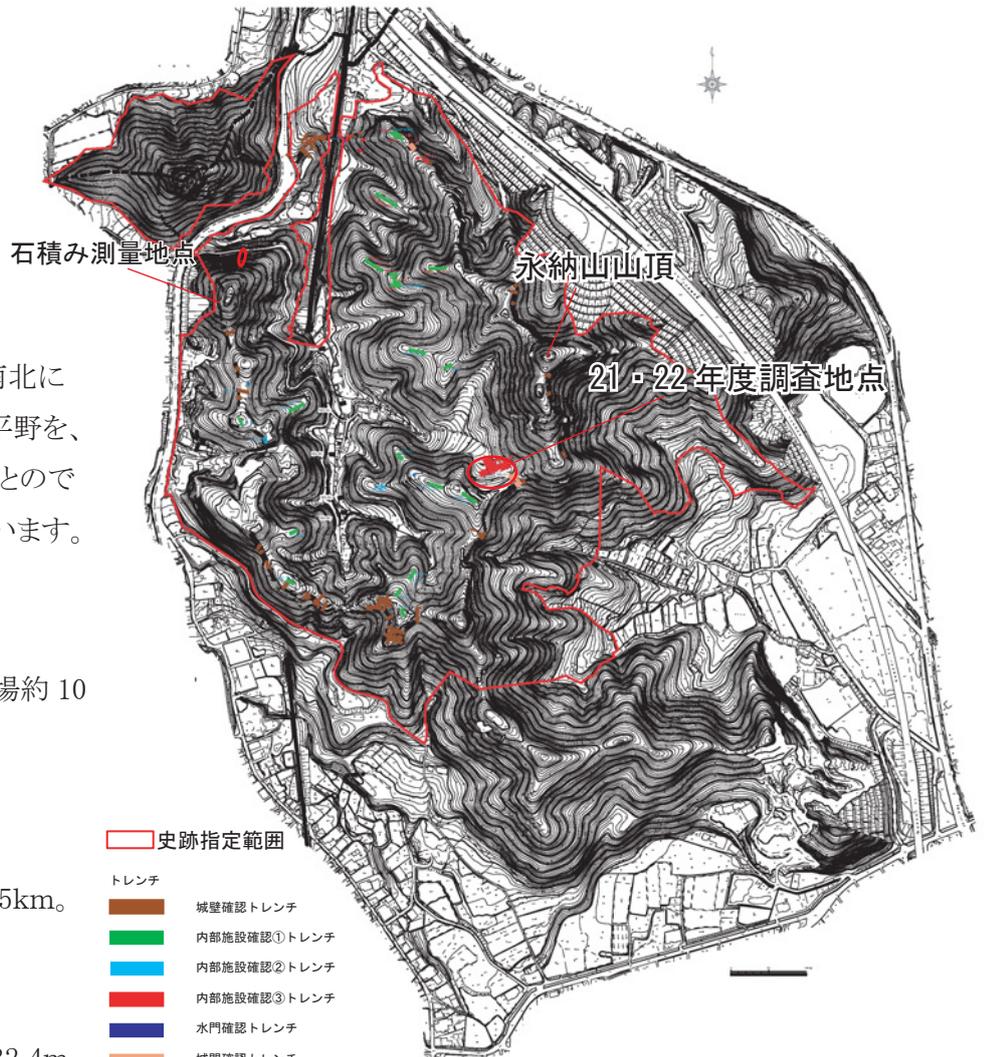
約 40ha (これは甲子園球場約 10 個分にあたります。)

(ウ) 城壁の長さは？

推定部分も含めて、約 2.5km。

(エ) 標高は？

最も高い頂上で、標高 132.4m。



永納山城跡地形図 (S=1/10000)

2 今回調査の内容

(1) 調査の目的は？

今年度は、大きく二つの目的の調査を実施しています。

- ①内部施設（倉庫等）の存在を確認する調査。昨年度に引き続き実施しています。
- ②西部石積みの測量調査。城壁構造の解明とともに、今後の保存・整備・活用のための基礎データとします。

(2) 調査の内容は？

ア 内部施設確認調査成果

鍛冶炉および鍛冶関連遺物の発見

鍛冶炉の発見は、日本の古代山城では、岡山県鬼ノ城に続き2例目となります。全国的に城内の状況がはっきりしていない古代山城でこのような成果があがったことは、永納山城のみでなく、古代山城全体の状況解明にも大きな成果であったといえます。

(ア) 検出遺構：鍛冶炉 1 基

規 模 直径約 25cm

平面形 円形

構 造 地面を掘りくぼめて炉底とする簡単な構造の鍛冶炉。周辺に低い土堤を巡らせていたと考えられます。

(イ) 出土遺物：ふいご 鞴はぐちの羽口 2点～（鞴：炉に風を送る送風道具。この時代の鞴は、動物の皮を袋状にしたものが利用されていたと考えられています。羽口とは、鞴の送風管の先につけられた土製品。）

てっさい 鉄 滓 200点～（鉄（製品）を造る際に出た不純物）

わんがたさい 椀形 滓 5点～（炉の底に溜まった鉄滓）

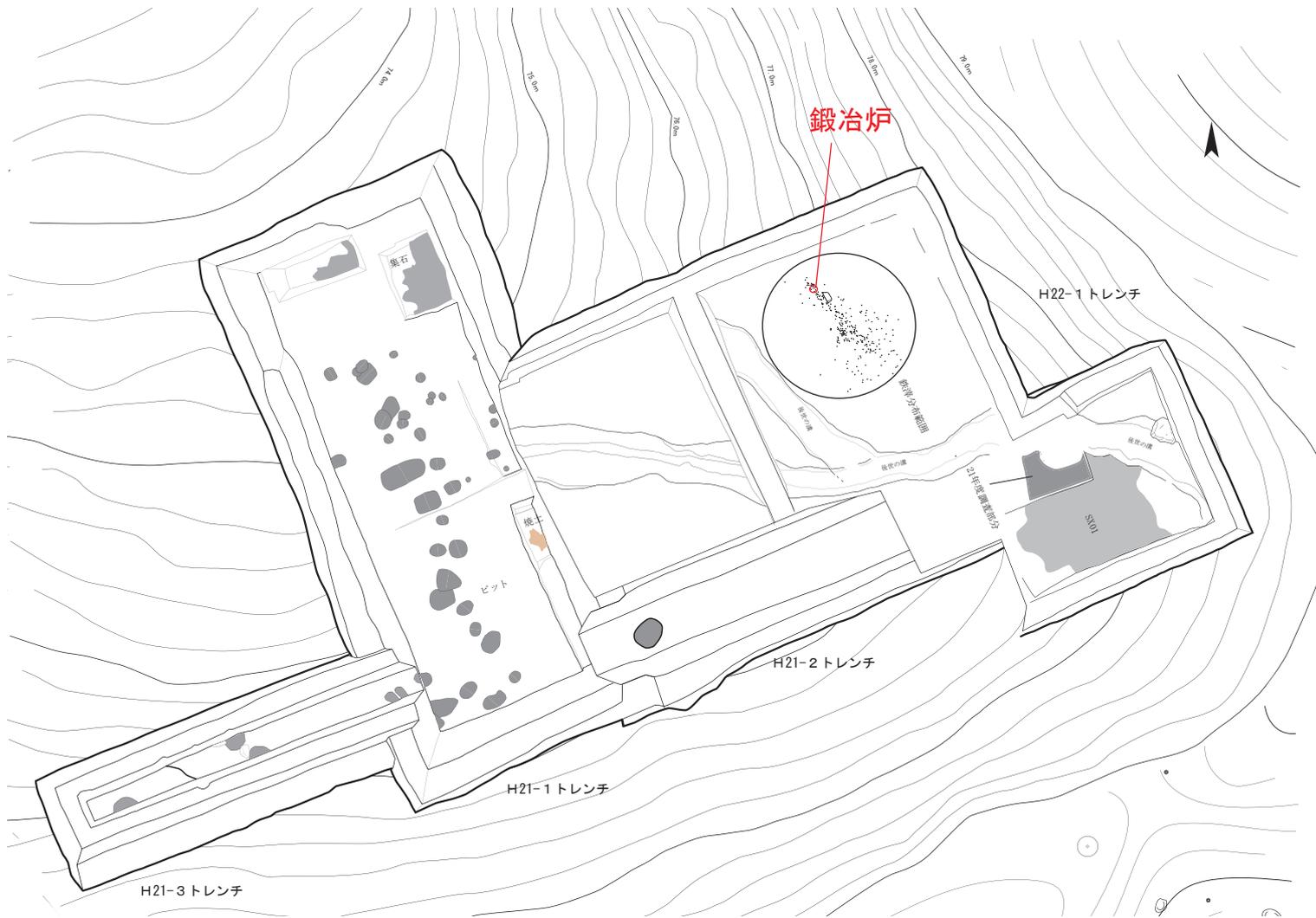
たんぞうはくへん 鍛造薄片 多数（鉄製品を鍛打した時に飛び散った、製品表面が剥がれた酸化物）

りゅうじょうさい 粒 状 滓 鉄塊の表面から流れ落ちた不純物のしずく

製 品 錐あるいは針状の工具

(ウ) 鍛冶関連遺構・遺物検出の意義と課題

- ①これまで不明であった城内の活動の一端が明らかとなりました。
- ②鍛冶炉の規模から簡易な鍛冶作業が想定され、実際に城内で鉄器作りが行われていたことが明らかとなりました。
- ③現在確認できている鍛冶炉は1基のみですが、鞴の羽口や椀形滓が複数出土していることから、さらに多数の炉が存在していた（している）ことが想定できます。
- ④一方でこの鍛冶炉が使用された時期については、永納山城築城の段階であるのか、築城後であるのか、2つの可能性が考えられます。この時期によって鍛冶炉の目的も異なってきます。



調査地位置図 (S= 1/200)

燃料 (炭)

鍛冶炉

金床

羽口

鞴

腕形滓

鍛造薄片

黄巻きで作られた、この時期特有の特徴がみとめられます。

椀状にくぼんだ形をしています。底には、炉底の砂（花崗岩の風化土）が付着していました。

2mm前後の小さなものが大半です。

鍛冶作業イメージ図と出土した鍛冶関連遺物

(エ) その他

現在は、昨年度検出した須恵器片を多量に含む遺構（SX01）の拡張調査や、その他の遺構（柱穴）の確認作業を実施中です。

SX01では、昨年度の現地説明会の際には、遺物を取上げておらず、詳細な時期の特定できる土器が検出されることが期待されましたが、残念ながら見つかりませんでした。今年度の拡張調査では、時期の特定が可能な遺物が出土することを改めて期待しています。

イ 西部石積みの測量調査

西部頂上付近に巡る城壁が石積みによって築かれていることは、これまでの表面調査で確認されていましたが、きちんとした記録はなされていませんでした。そこで、今年度はこの石積み周辺を清掃し、現状を確認した上で3次元レーザー測量を実施しました。現在は、現地で測量したデータを屋内で整理している段階です。これらの成果によって、石積みの立体的な記録（図化）ができ、その成果は今後の保存や整備の上でも活かされてきます。

石積みデータ（表面清掃段階）

- ①石積み距離 約 22m
- ②高さ 最大約 2 m
- ③段数 現状最大 5 段
- ④基礎 地山の岩盤を削平した上に積まれる。



西部頂上に築かれた石積み（一体、何の目的でこの場所に石積みを築いたのでしょうか。）

3 おわりに

城内の内容解明を目的として実施してきた確認調査も、いよいよ終盤をむかえてきました。来年度は、城外から城内への城壁構造の把握を目的とした城壁の横断的調査を行うとともに、21年度から実施してきた調査の成果とそこから見えてきた課題をまとめた調査報告書を作成予定です。

今後とも、史跡永納山城跡の調査、そして保存・整備・活用に向けご理解とご協力をよろしくお願い致します。